

訪問看護師が診療看護師（NP）資格認定を受けたことによる活動および役割の変化 —訪問看護師自身の認識を通して—

Exploring the factors that influence the practices and roles for a home-visit nurse practitioner (NP) transitioning from a nurse.

西澤亜紀子¹⁾・松下由美子²⁾

1) 市立大町総合病院 診療看護師, 2) 佐久大学大学院看護学研究科客員教授

要 旨

【目的】

訪問看護師が診療看護師（NP）資格認定を受けたことにより、自身の活動と役割にどのような変化があったと認識しているかを明らかにする。

【対象と方法】

訪問看護師が診療看護師（NP）資格認定を受けた後、さらに訪問看護師として活動している2名を対象として半構造化面接を行い、質的記述的分析を行った。本研究は佐久大学研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】

診療看護師（NP）資格認定による訪問看護師の活動の変化に関する認識は、4つのコアカテゴリーで構成されており、《利用者の療養生活の質向上のために高度実践力を発揮》、《見聞や人脈の広がりによる活動範囲や機会の拡大》、《訪問看護人材の育成力の向上》、《訪問看護師としての自信の喪失と回復》であった。役割の変化に関する認識は、《施設内における役割の変化》、《他施設からの相談に応じる役割発揮と相談体制の構築》、《地域での役割拡大》、《看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大》の4つのコアカテゴリーで構成されていた。

【考察】

診療看護師（NP）資格認定を受けた訪問看護師は、大学院教育で得た高度実践力と見聞・人脈の広がり在宅療養者の生活の質向上のために活用し、多職種協働における中心的役割、在宅医療の質向上のためのリーダー的役割、看護専門職育成の指導者的役割などを務め、施設内から施設外、地域へと役割を拡大していた。

Key Words：診療看護師（NP）、訪問看護師、活動、役割、変化

I. 緒言

団塊の世代が後期高齢者となる2025年には、高齢化率が30%を越えるとされており、在宅ケアの対象者の急増が見込まれている¹⁾。また近年、医療ニーズの高い医療的ケア児や精神障がいがある在宅生活者、認知症の

人、人生の最期を迎える人なども急増しており、これらの人々の重度化・多様化・複雑化も進行している。在宅で暮らす人々を支えるための重要な課題は、日本全国どこでも24時間365日、いつでも必要な質の高い訪問看護サービスを届ける仕組みをつくることといわれている²⁾。全国の訪問看護ステーション数は、10年前と比

べると2倍に増加しているが、全従事者における看護師数の割合は10年前と比べ低下している²⁾。現在訪問看護師として活動している者の66%は、訪問看護師数が不足している、あるいは将来的に不足すると考えている³⁾。その背景として、訪問看護利用者の様々なニーズに対応していくことへの困難感が存在することが明らかにされており^{4) 5) 6)}、これらの困難感を軽減する方法としては、訪問看護に必要なより高度な専門的知識と技術を習得することが有効だと考えられている⁴⁾。

高度な専門的知識と技術を習得する手段としては、訪問看護認定看護師（日本看護協会，2006年より認定）、在宅看護専門看護師（日本看護協会，2012年より認定）、看護師特定行為研修修了（厚生労働省，2015年より認定）および診療看護師（日本NP教育大学院協議会，2010年より認定）資格の認定という方法がある。訪問看護師が看護関連資格を取得したことによる活動および役割の変化については様々な先行研究が行われているが^{7) 8) 9)}、訪問看護師が診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる活動および役割の変化についての研究は認められない。

そこで、本研究では訪問看護師として活動していた者が診療看護師（NP）資格の認定を受けたことにより、自身の活動および役割にどのような変化があったと認識しているのかを明らかにしたいと考えた。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究では、訪問看護師が診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる活動と役割の変化に関する認識を明らかにするため、半構造化面接法を用い、質的記述的研究による分析を行った。

2. 研究参加者

訪問看護師として3年以上活動後、診療看護師（NP）資格の認定を受け現在訪問看護師として活動している者2名とした。

3. 調査方法

期間：2020年10月～12月

1) データ収集方法

インタビューガイドを用いた半構造的面接を実施した。インタビュー内容は、診療看護師資格の認定後の活動範囲の広がり、施設内・外での役割の変化についてであった。面接は研究参加者1名に対して研究者1名が行い、COVID-19による感染対策としてオンラインシステムを利用した。インタビューは研究参加者1名に対して1回行い、情報の不足があった1名については参加者の同意を得て、電話インタビューによる追加の聞き取りを実施した。インタビュー時間は約30分であり、参加者の同意を得てICレコーダーに録音した。

4. 分析方法

ICレコーダーに録音したデータを逐語録に起こし、逐語録を精読してテキストデータを作成した。研究参加者毎に「診療看護師（NP）による訪問看護師としての活動と役割の変化」に関する語りを文脈の意味が損なわれないよう抜粋し、コードを作成した。活動の変化と役割の変化それぞれについて共通性の観点からコードを集めてサブカテゴリーを作成、更に同様の方法でカテゴリー、コアカテゴリーを作成した。なお、研究の信憑性（trustworthiness）を確保するため、明解性（dependability）、信用性（credibility）、転用可能性（transferability）、確認可能性（confirmability）の4つの基準¹⁰⁾を用いた。

5. 倫理的配慮

この研究は、事前に佐久大学研究倫理委員会の承認を得て（承認番号2020003号）、これを遵守した。研究参加者には、この研究により、個人や施設が特定されないことなどの匿名性を文書と口頭で説明した。また、文書にて研究の趣旨、調査内容・手順を説明し、研究の趣旨の理解を得て同意書に署名を得た。

III. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者2名は50歳代の女性で、訪問看護師経験年数10年以上、診療看護師（NP）資格認定後5年以上であり、共に医療法人が開設した訪問看護ステーションの管理者であった。

2. 分析結果

逐語録より、活動の変化については、22のコード、13のサブカテゴリー、8のカテゴリー、4のコアカテゴリーが抽出された（表1）。また、役割の変化については、26のコード、11のサブカテゴリー、7のカテゴリー、4のコアカテゴリーが抽出された（表2）。

本研究における表記方法は、コアカテゴリーを《 》、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〈 〉で記し、参加者の語りは、「 」で記すこととし、語りの意味を補うために（ ）内に補足の文章を記した。

1) 診療看護師（NP）資格認定による活動の変化

(1) 《利用者の療養生活の質向上のために高度看護実践力を発揮》

【利用者の病態や治療について把握し、それを反映した療養生活上のアドバイスができるようになった】

「今まで自分達の思っていたことより、治療や薬の意味がもっと色々な意味があるのだと、薬とか治療に関しての見方が変わった。それによって多少手間がかかって、この薬は切らない方がいいという配慮とか、今標準的な治療が行われているのかを常に確認するようになった。」

「（診療看護師（NP）資格認定のための学修が役立ったと感じられるのは）、患者さんの病態を読み解くとか（できるようになったこと）。」

「NP（の大学院）に行く前は在宅訪問に行って自分の曖昧な判断のもと色々な判断をし、『まだちょっと大丈夫だと思うので様子を見ましょね。』とよく使っていた。例えば、様子を見ると言った時に、いつまでどういう症状の様子みてもらって、見ていくうちにこういうことが起きたら訪問看護に連絡、こういったことがなければ明日電話するので、そこまで経過がみられる症状なので大丈夫ですとか、こういうことになったらそれは待てるものではないので必ず連絡くださいとか、「様子を見る」という内容を細かくきちんと伝えられること。」

「お薬に関してもきちんと説明できることが患者さんの療養していくうえで、療養される方々に関しての安心材料になるのではないかとと思う。」

「病状管理で伺っている患者さんに、『（医師からもらった検査）データ読み解いて欲しい。』とか言われ、これはどういう意味か説明したり、それに対して何をす

ればいいのかアドバイス（したり）。例えば、人工呼吸器で呼吸管理をしている小児との関わりでは、『1回換気量が下がってしまってバックアップしているのだけどどうしたらいいか。』って連絡があって、訪問して、胸の音は左が弱い、とりあえず呼吸リハをして痰を出そうかみたいなの。併せて手持ちの去痰剤を使おうとか『水を飲ませようね』と母親にアドバイスするとかですね。」

以上の語りから、訪問看護師が診療看護師資格の認定を受けたことにより、【利用者の病態や治療について把握し、それを反映した療養生活上のアドバイスができるようになった】ことが把握できた。

【利用者の問題を理論的、倫理的に考えることができる】

「正しいことをやることができる。あまり外れたものとか、今はこういったことやらないなっていうのはどうやって修正しようかなっていうのは思う。」

「大学院を出ることで物の考え方が、非常に広がったっていうのはある。理論的に考えるとか、患者さんの問題を倫理的に考えるとか、そういうものが理論を習ったことで大きな変化かなって思う。」

以上の語りから、大学院における理論、倫理に関する学びが診療看護師実践に活かされ、活動に変化が生じていることが示された。

【エビデンスを活用しながら、病状に合わせた疾患管理を行っている】

心不全の患者との関わりで、「ケアマネさんが『できるだけ動かして元のように活発な方に戻して下さい』みたいな感じで言われるが、でもこの人心不全だよ。運動適応ないよ。でもその中でも心不全の運動のエビデンスもあるし、心不全として心リハの対応のリハをして行こうとかですね、それに併せて疾患管理はこうしていこうとかですね。」と語られ、大学院教育で得た知識を活用してエビデンスに基づいた疾患管理に取り組んでいることが示された。

【利用者の辛さや心配に配慮して、必要なケアしたいという思いが強まった】

「当たり前なことなんですけど、思いやりを持って接していきたいと思っているので、こっち目線のケアとかするんじゃなくて、利用者さんが何を必要としているのか、どういう思いを抱えているのか。やっぱり、病気とか障害を持った人って辛いわけですよ。なので、その辛さをちゃんと分かったうえで配慮ができるとか、必要

なケアができるといった形でできるといいと思う。」

「患者さんの心配なことがきちんと安心に変えられる存在でありたいなと思って。」と語られ、診療看護師（NP）としての学修が、患者の置かれた状況や心情への理解を深め、必要なケアをしたいという思いが強まったことが示された。

以上の4カテゴリーから、訪問看護師が診療看護師（NP）資格の認定を受けたことにより、《利用者の療養生活の質向上のために高度看護実践力を発揮する》ようになったことを把握できた。

(2) 《見聞や看護実践力の広がりによる活動の範囲や機会の拡大》

【医師から依頼がくるようになり、特定行為を行う範囲や機会が増えた】

「先生たちの中には、最初のうちは何それっていう感じ（の人がいた）。今は開業の先生でも、『君何々の特定行為研修受けているのだよね、事情があって（往診できないので）この日のガスデータ代わりにやっておいてくれる。』とか、そういう話しはくれるようになった。」

「訪問看護の中で、特定行為に関しては、自分のできる範囲が増えたことで患者さんが定期受診、交換等のためだけに受診することが無くなり、患者さんから喜びの声があった。」

「特別管理加算1の中に管類の交換や管類の管理を必要とする人への加算があるので、微々たるものだが訪問看護ステーションへの加算が増える。」

以上の語りから、活動範囲の拡大により特定行為を行う範囲や機会が増えたり、訪問看護ステーション経営における経済的な効果があったりしたことを確認できた。

【見聞や人脈の広がりがあり、活動範囲は非常に変わった】

「大学院出ることによって私が他に持っている資格では得られなかった見聞の広がりとか人脈や、ものの考え方が、非常に広くなった。」という語りから、活動範囲が拡大したことが示唆された。

以上の2つのカテゴリーから、《見聞や看護実践力の広がりによる活動の範囲や機会の拡大》という変化が確認された。

(3) 《訪問看護人材の育成力の向上》

【自分の行為の安全性やエビデンスをスタッフに伝えるようになった】

「自分が特定行為だけじゃなくてそれをするものの安全性とかエビデンスとかそういうものを訪問看護ステーションの中に落とすことで、スタッフ自体の知識が上がったというのはある。」

「訪問看護師が、訪問先で管交換の時期を判断する場合、（NPを交えた）普段からのディスカッションの中でどんどん培ってきていて、一般の定期訪問で、『来週私に変えに行くけど間に合わないかもよ。』と言ってくれる判断とか、そういうのが出来るようになった。」

以上のように、【自分の行為の安全性やエビデンスをスタッフに伝えるようになった】ことにより、スタッフの知識や判断力の向上という成果があったことについても確認された。

(4) 《訪問看護師としての自信の喪失と回復》

【訪問看護師としての活動に自信がなくなり、5年位経つ頃から自信を持てるようになった】

「誰でもそうだと思うのですが、たぶん（資格）をとった最初は自信がなくなるのです。今まで3つのことを診て判断していたことが、6つ、7つ診て判断するようになって、今まで簡単に決められたことを決められなくなって、これも考えなきゃいけない、あれも考えなきゃいけないって、これでよかったとか、看護とはまた絶対違う視点が入ってくるので、その自信はたぶん最初はなくなっていき、（中略）NPとして1年目じゃない、フレッシュマンとして戻りながら、ひとつずつ積み重ねていく感じだけは。」「自信とか全然ないですね、自信ついたことそんなないかも。」

「（自信が持てるようになったのは）、5年位経つ頃かしらね。今でもそんなに自信があるわけではないですけど。」以上のように、診療看護師（NP）資格の認定を受けたことにより、《訪問看護師としての自信の喪失と回復》という経験をしたことが語られた。

2) 診療看護師（NP）資格の認定による役割の変化

(1) 《施設内における役割の変化》

【侵襲性の高い処置を診療看護師（NP）が行うという役割分担ができた】

表1. 活動の変化のカテゴリー表

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
利用者の療養生活の質向上のために高度看護実践力を発揮	・利用者の病態や治療について把握し、それを反映した療養生活上のアドバイスができるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> ・治療や薬に関しての見方が変わり、標準的な治療であるか確認したり、病態を読み解くことができるようになった。 ・「様子を見る」という内容を詳細に伝えられるようになった。 ・薬についてきちんと説明できるようになった。 ・データの意味を読み取り、データを反映した療養生活についてのアドバイスを行う。
	・利用者の問題を理論的、倫理的に考えることができるようになった。	・利用者の問題を理論的、倫理的に考えることができるようになった。
	・エビデンスを活用しながら、病状に合わせた疾患管理を行っている。	・エビデンスを活用しながら、病状に合わせた疾患管理を行っている。
	・利用者の辛さや心配に配慮して、必要なケアをしたいという思いが強まった。	・利用者の辛さや心配に配慮して、必要なケアをしたいという思いが強まった。
見聞や看護実践力の広がりによる活動の範囲や機会の拡大	・医師から依頼がくるようになり、特定行為を行う範囲や機会が増えた。	<ul style="list-style-type: none"> ・医師から依頼がくるようになり、特定行為を行う機会が増えた。 ・特定行為に関して自分のできる範囲が増えた。
	・見聞や人脈の広がりがあり、活動範囲は非常に変わった。	・大学院を修了したことで、見聞や人脈の広がりがあり、活動範囲は非常に変わった。
訪問看護人材の育成力の向上	・自分の行為の安全性やエビデンスをスタッフに伝えるようになった。	・自分が行っている特定行為の安全性やエビデンスをスタッフに伝えている。
訪問看護師としての自信の喪失と回復	・訪問看護師としての活動に自信がなくなり、5年位経つ頃から自信が持てるようになった。	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問看護師としての活動に自信がなくなる。 ・5年位経つ頃から自信をもって活動できるようになった。

「スタッフとしてみたら、そこは私がやるから自分達はやらなくていいとか、ここまできたら任せられるとか、侵襲性の高い処置を誰がするかという役割分担は（訪問看護ステーション内で）できた。」と、診療看護師（NP）として施設内での役割分担が確立したという変化について語られた。

(2) 《他施設からの相談に応じる役割発揮と相談体制の構築》

【他施設の看護職の不安や心配事への相談体制をつくった】

「他のステーションの看護師から、『自分の行った処置が不安だから、申し訳ないけど確認してほしい。』って言われて行くことはある。」「特養の入所者のことで看護師から相談を受ければ色々とアドバイスすることがある。」

「認知症グループホームの看取りの不安についてバックアップして、看取りもしっかりやってくれるようになった。特養は心配があったら相談できる体制をつくっている。」これらの語りは、診療看護師（NP）としての能力を施設外でも発揮し、必要な助言を行うスーパーバイザーとしての役割発揮を表していた。

(3) 《地域での役割拡大》

【地域の中での自分の役割を考えられるようになり、多職種連携の会の設立・運営を行っている】

「大学院を出たことで今までどうしようかと思っていたことも行動に移せるようになって、訪問看護ステーションの中だけでなく、地域のなかで自分の役割、何ができるのかを考えられるようになった。」

「訪問看護ステーション連絡協議会を立ち上げて、ステーション格差がなく得意とするところを認めあえるス

表2. 役割の変化のカテゴリー表

コアカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
施設内における役割の変化	・侵襲性の高い処置を診療看護師（NP）が行うという役割分担ができた。	・侵襲性の高い処置はA氏の仕事という役割分担ができた。
他施設からの相談に応じる役割発揮と相談体制の構築	・他施設の看護職の不安や心配事への相談体制をつくった。	・他施設の看護職の不安や心配事への相談体制をつくった。
地域での役割拡大	・地域の中での自分の役割を考えられるようになり、多職種連携の会の設立・運営を行っている。	・地域の中での自分の役割を考えられるようになった。 ・地域の訪問看護・介護事業所の連携を深めるために連絡協議会を立ち上げた。 ・地域の医療連携の会の企画・運営をしている。
	・市内の住民との交流が増え、講演活動などするようになった。	・市内の住民との交流が増え、講演活動などするようになった。
看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大	・スタッフの育成に力を発揮できるようになった。	・スタッフから、対象者の体調変化や褥瘡発生など見て欲しいと言われ同行する。 ・スタッフの知識や判断力を高めるために、大学院で学んだ知識を伝える。
	・教育的な役割が広がった。	・その人が持っている力を最大限発揮してもらう。 ・学生指導など大学との繋がりができた。
	・地域の専門職能団体における役割を担うようになった。	・地域の専門職能団体での役割を担う。

ーション連携作りをした。」「ヘルパーステーションの管理もしているが、ヘルパーステーションの連絡協議会も立ち上げてヘルパー同士の連携や、地域の中で医療・介護連携の会で中心的な役割をするようになった。」という語りが得られ、地域の在宅医療の質向上のためにリーダー的な役割を担っていることが示された。

「地域や医療福祉の関係者との連携はかなりとっていると。いくつかは地域の中での連携の会を立ち上げからやっている。」

「新型コロナウイルス感染症の問題で、地域で感染予防の有志の会をつくろうと声上げをしたら、色んな方が集まり、今市内の何十カ所の事業所のスタッフや管理者が集まり、30人くらいの有志の会ができて、地域全体でまずクラスターを出さないことを目標にやっている。」

「地域の介護・医療連携の会の中で、積極的な発言をしたり活動をしたり、セッションの企画だとか、みんなでシンポジウムをやったりしている。」という語りから、地域の多職種連携の推進役として中心的な役割を果たしていることが示された。

【市内の住民との交流が増え、講演活動などするようにな

った】

「市全体での活動が増えてきている。出前講座とか、高齢者の長寿大学とか、そういう講演をさせてもらえるなど、非常に多くなった。」と語られ、診療看護師（NP）として、地域住民の中に溶け込み活動する姿が捉えられた。

以上の二つのカテゴリーから、《地域での役割拡大》という変化が認められた。

(4)《看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大》
【スタッフの育成に力を発揮できるようになった】

「ここは様子と一緒に見て欲しい、最近体調が優れないのだけとか、あと急に褥瘡ができたけどとか、それぞれです。いろんな理由で、オーダーがあったときは一緒に同行している。褥瘡のデブリについては、もうちょっと切ったほうがいいですか、という相談を受けて処置に行くとか。」

「スタッフは、曖昧な疾患とか症状のところで判断に迷う時には相談してくれる。」

「自分が特定行為だけじゃなくてそれをする事の安

全性とかエビデンスとかそういうものを、ただ交換するのではなくて、そういうものをなぜこうなのかって言うのを訪問看護ステーションの中に落とすことで、スタッフ自体の知識が上がった。」

これらの語りから、スタッフの知識向上のために大学院教育で培った能力を発揮していることが示された。

【教育的な役割が広がった】

「人に何かをお願いして動いてもらうとか、その人が持っている力を使って、その人の力を最大限発揮してもらう。そういうところに私の力、大学院で学んだ力が出せているかなとは思う。」

「大学院だとか学生の指導とか、実習受け入れとかやれるようになり、大学との繋がりとかも多くなった。」

以上、自施設のスタッフや看護の後輩の育成に関する教育的な役割拡大が生じたことが語られた

【地域の専門職能団体における役割を担うようになった】

「地域のNP協議会での役割をしている。」

専門職能団体の地域支部活動に携わり、診療看護師（NP）の職能を維持・発展させる役割を担っていることが示された。

以上のカテゴリから、《看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大》に取り組んでいることが示された。

IV. 考察

1. 診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる訪問看護師としての活動の変化

1) 利用者の療養生活の質向上のために高度看護実践力を発揮する

研究参加者は、大学院教育で得た病態生理学や臨床薬理学の能力により在宅療養者の病態を読み解き、治療や薬剤の適正性を確認する力量が身についたことで、エビデンスに基づいた疾患管理を行っていた。また高度な看護実践力を発揮し、在宅療養者の療養生活の質向上のための支援やアドバイスを行っていた。診療看護師（NP）とは、生活者の視点に立ち、対象者のQOLの向上を目指し、「ケア」と「キュア」を同時に提供できる看護師と定義されている¹¹⁾。「ケア」の知と「キュア」の知とを統合し、「キュア」を内包するケアを実践することによって、より質の高いケアの実現が求められており、高

度な知識や技術を駆使し、「ケア」と「キュア」を融合させながら看護実践することで、対象の治療・療養過程全般を管理・実践していくことが可能になる¹²⁾。診療看護師（NP）は、大学院教育で培った病態生理学・臨床薬理学などの病態・治療に関する知識を基に、在宅療養者とその家族が安心した療養生活を継続できるような活動を行えるようになっていた。

さらに、大学院における理論、倫理に関する学びにより、患者の置かれた状況や心情への理解が高まり、必要なケアをしたいという思いが強まったことが語られた。訪問看護師や保健師など地域で活動する看護職には、地域看護に特徴的な倫理的問題があり、日常的なケアがパターン化しないよう、在宅療養者のために、倫理的に最善の判断と行動をとれることが重要である¹³⁾。今後、地域包括ケアシステムの推進により、医療ニーズが高い患者や住み慣れた場所でのターミナルケアを望む在宅療養者の増加が予測されており、訪問看護師が倫理的課題に直面することが増えると考えられる。診療看護師（NP）として培った理論的、倫理的な能力を更に高め、活用していく必要がある。

2) 見聞や看護実践力の広がりによる活動の範囲や機会の拡大

研究参加者から、大学院修了による見聞や人脈の広がりが、訪問看護師としての活動の範囲や機会の広がりに関与していることが語られた。また、エビデンスに基づいた安全な特定行為の実践により、医師の信頼を得て訪問看護師としての活動範囲の拡大に繋がっていること、その効果として在宅療養者の負担軽減や安心感に繋がっていることが確認できた。地域包括ケアの推進に向け訪問看護が目指す姿は、必要な時には24時間365日訪問看護サービスを十分提供できるようにすることである。そのためには、適切な判断力を身につけ、特定行為を安全に実施できる訪問看護の質向上が重要だと言われている²⁾。24時間対応可能、訪問可能など、在宅療養者が必要な時に必要な医療をタイムリーに届けるために診療看護師（NP）の役割が重要だとされる¹⁴⁾。診療看護師（NP）の活動の範囲や機会の拡大は、在宅療養者が地域で暮らし続けるための負担軽減や安心に繋がる重要な要素であると考えられる。

3) 訪問看護人材の育成力の向上

研究参加者は、特定行為実践の安全性やエビデンスをスタッフに伝える活動により、スタッフの知識や判断力の向上という成果があったことについて語った。高度実践看護師は、他の人達が最善の実践ができるよう、ロールモデルとならなければいけないし、指導者、教育者としても貢献する必要がある。そして、診療看護師（NP）資格の認定を受けた訪問看護師が、大学院教育で培った知識・技術をスタッフと共有していくことは、施設全体の知識向上に繋がり、在宅療養者の質の高い生活に寄与できると考える。

4) 訪問看護師としての自信の喪失と回復

研究参加者は、資格認定を受けたことにより訪問看護師としての活動に自信がなくなったと語った。これは、大学院教育で培った知識により、収集する情報が増え、判断のための根拠や価値観にも広がりを生じたことから自身の判断に自信が持てなくなったことを現わしていると考えた。

「どんなナースでも、経験したことの無い患者が対象となる臨床場面に入ったとき、ケアの目標や手段に慣れていなければ、実践レベルは初心者段階である」¹⁵⁾と述べられるように、今回の研究参加者たちは、経験のない患者を対象としているわけではないが、訪問看護師として自信を失う経験をしている。これは、臨床判断のための枠組みに「臨床推論」という医師の判断過程や、対象者の病態や治療に関する知識が加わったことにより、あたかも経験のない患者を目の前にしている初心者のような段階に戻ったのではないかと考える。

プライマリ・ケア領域における修了生の今後の課題として、客観的データの分析や医学的モデルからのエビデンスに基づく考え方が重要であり、データ収集・分析能力が求められ、フィジカルアセスメント、薬理学、病態生理学の学修を医師の専門性の観点から学び、患者の病態を臨床推論できる思考過程を身につけることが必要である¹⁶⁾。実際に研究参加者からも、大学院教育の在り方の検討と大学院教育に引き続く卒後研修の重要性が語られていた。訪問看護師として自信を持って活動していくには、大学院教育における共通科目や基本的な理論の学修の重要性、更に大学院教育で得た知識と技術を向上させるため、修了後も在宅療養者と接しながら日々研鑽

していく必要があるという課題が示された。

2. 診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる訪問看護師としての役割の変化

1) 施設内における役割の変化

研究参加者より、施設内で侵襲性の高い処置を行うという特定行為実践に関する役割の確立と、自身の行っている特定行為実践の安全性とエビデンスを伝えることによる、スタッフの判断力と知識の向上について語られた。高度実践看護師として大学院教育で培った能力を発揮することが、施設内での役割の変化に繋がっていた。

2) 他施設からの相談に応じる役割発揮と相談体制の構築

研究参加者は、他施設の看護職員と連携し、利用者についての相談や不安に対し必要な助言を行うスーパーバイザーとしての役割発揮と相談体制の構築について語った。施設外でも診療看護師（NP）としての対人的能力を発揮して役割を拡大し、よい関係性を構築していくことは、利用者の生活の質向上に繋がっており、これは、診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる新たな役割の獲得であったと考える。

3) 地域での役割拡大

研究参加者は、大学院で学修したことにより、地域の中での自分の役割を考えられるようになり、在宅医療の質向上のためのリーダー的な役割や、多職種連携・地域医療連携の推進役として中心的な役割を果たしていた。また、地域住民の中に溶け込み活動するなど、地域における積極的な役割拡大について語られた。

在宅領域では、在宅療養者と家族の最善（幸せ）のために、共通目標のもと多職種連携（IPW）が重要であるとされる¹⁷⁾。その一方で、職種を越えて連携・協働すること、適切な役割分担を行うこと、チームで情報を共有することの困難について報告されている¹⁸⁾。そのようななかで、参加者たちは診療看護師（NP）として培った「チームワーク・協働能力」を最大限に発揮し、在宅療養者にシームレスなケアを提供していくために、多職種連携（IPW）の中心的役割を担っていた。また、大釜は「診療看護師（NP）には、的確な慢性疾患に関する医学知識に基づき、地域住民にとってより身近に存

在しながら、各住民の生活様式や地域特性をアセスメントしつつ、個別性のある保健指導を実践していくことで、健康寿命を延ばせることについて期待したい。健康寿命の延長は地域住民の生活の質の向上にも寄与できるほか、国民医療費の適正化にも貢献できると思われる。」と述べており¹⁹⁾、地域医療における役割拡大への期待が大きいと言える。

4) 看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大

研究参加者は、大学院教育の中で培った、その人の持っている力を最大限に発揮してもらおうといった教育的な能力を、施設スタッフや学生などの看護専門職育成という役割のなかで発揮していた。また地域の専門職団体の活動も担っており、診療看護師（NP）の存在価値を社会に明示していく重要な役割を担っていることが明らかになった。

V. 本研究の限界

本研究は、2名の研究参加者の認識を通して得られた結果であり、客観性に欠ける点が限界である。

VI. 結論

診療看護師（NP）資格の認定を受けた訪問看護師が、資格認定を受けることによって活動と役割にどのような変化があったと認識しているかについて検討した結果、次のことが明らかになった。

1. 診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる訪問看護師の活動の変化は、「利用者の療養生活の質向上のために高度看護実践力を発揮する」、「見聞や看護実践力の広がりによる活動の範囲や機会の拡大」、「訪問看護人材の育成力の向上」、「訪問看護師としての自信の喪失と回復」の4点に認められた。
2. 診療看護師（NP）資格の認定を受けたことによる訪問看護師としての役割の変化は、「施設内における役割の変化」、「他施設からの相談に応じる役割発揮と相談体制の構築」、「地域での役割拡大」、「看護専門職を育て、職能を発展させる役割の拡大」の4点に認められた。

謝辞

本研究を進めるにあたり、協力してくださった診療看護師（NP）に心より感謝いたします。

利益相反

本研究遂行にあたり利益相反は存在しない。

VI. 文献

- 1) 厚生労働省：地域包括ケアシステム。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ (2019.08.05)
- 2) 一般社団法人全国訪問看護事業協会：訪問看護アクションプラン2025.2014.
- 3) 厚生労働省：看護職員の現状と推移。
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai1080100IseikyokuSoumuka/0000072895.pdf> (2020.05.04)
- 4) 林一美, 石川倫子, 塚田久恵, 他：過疎地域の訪問看護師が看護実践で感じる判断上の困難。石川看護雑誌, 16：59-65, 2019.
- 5) 新田順子, 林千鶴子：学びの中での仲間づくりと質向上を。訪問看護と介護, 9 (1)：25-30, 2004.
- 6) 柴田滋子, 富田幸江, 高山裕子：訪問看護師が抱く困難感。日農誌, 66 (5)：567-572, 2018.
- 7) 佐藤弥生, 桜井礼子：修了生の現状からみた訪問看護認定看護師の活動の場と役割についての検討。看護科学研究, 10：9-13, 2012.
- 8) 宇佐美しおり, 吉田智美, 高山良子, 他：在宅療養移行支援（Transitional Care）における専門看護師の活動実態と評価。看護, 67：7, 2015.
- 9) 光根美保：訪問看護ステーションの特定看護師の活動の実態。看護科学研究, 11：23-28, 2013.
- 10) Lincoln, Y.S. and Guba, E.G: Naturalistic Inquiry. 301-331, Sage Publications, 1985.
- 11) 草間朋子：ナースプラクティショナー（NP）の養成。看護, 61 (10)：48-49, 2009.
- 12) 野嶋佐由美：看護の知の構築に向けての方略。日

- 本看護科学誌. 32 (2) : 72-76, 2012.
- 13) 小西恵美子：看護倫理（改訂第2版）よい看護・よい看護師への道しるべ. 南江堂, 東京, 2017.
- 14) 吉村伊世, 大隈咲季, 藤内美保：求められるナースプラクティショナー（診療看護師）とは. 看護, 62 (10) : 90-95, 2010.
- 15) パトリシア・ベナー. 井部俊子, 井上真澄, 上泉和子訳:ベナー看護論達人ナースの卓越性とパワー. 医学書院, 15, 東京, 1992.
- 16) 草野淳子, 小野美喜, 福田広美, 他：プライマリ・ケア領域の診療看護師（NP）教育に求められるもの—修了生の意見分析から—. 日本NP学会誌, 2 (1) : 17-25, 2018.
- 17) 平原佐斗司：在宅医療テキスト. 公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団, 38-39, 東京, 2017.
- 18) 吾妻知美, 神谷美紀子, 岡崎美晴, 他：チーム医療を実践している看護師が感じる連携・協働の困難. 甲南女子大学研究紀要, 7 : 23-33, 2013.
- 19) 大釜信政：日本のプライマリ・ケアにおいて米国簡易診療所ナース・プラクティショナーの職能を活用することの有用性と課題. 帝京科学大学紀要, 16 : 61-70, 2022.

Abstract

【Purpose】

We conducted a qualitative analysis to identify factors that influence changes in practices and roles on transitioning from home-visit nurse to nurse practitioner (NP).

【Methods】

A semi-structured interview was conducted with two home-visit NPs, and an analysis was conducted using a qualitative descriptive study design.

【Results】

We identified four core components that influence home-care NP practice changes: “applying one’s advanced practical skills to improve patients’ quality of life”, “expanding fields of practice and opportunities using one’s skills and networking”, “providing one’s advanced educational skills to home-visit nurses”, and “losing confidence and subsequently recovering confidence as a home-visit nurse”. We also identified four core components that influence home-care NP role transition: “changes in roles within the facility”, “taking on a consultant role and building a consultation system with other facilities”, “expanding one’s role in the community,” and “taking on a role as a trainee to educate nurses and establish professionalism”.

【Considerations】

These study findings reveal that home-visit NPs transitioning into their role from being nurses demonstrate advanced practical skills and apply their knowledge and personal connections to improve the quality of life of home medical care patients. Furthermore, they expand their roles as leaders in multidisciplinary collaboration, improve the quality of home-care, and help train other nursing professionals. We also found that NPs expand their fields of practice beyond their facility and into the community during this transition.

Key Words : nurse practitioner (NP), visiting nurse, activity, role, change